

中谷宇吉郎 雪の科学館 通信

NAKAYA UKICHIRO  
MUSEUM OF  
SNOW AND ICE

特別号

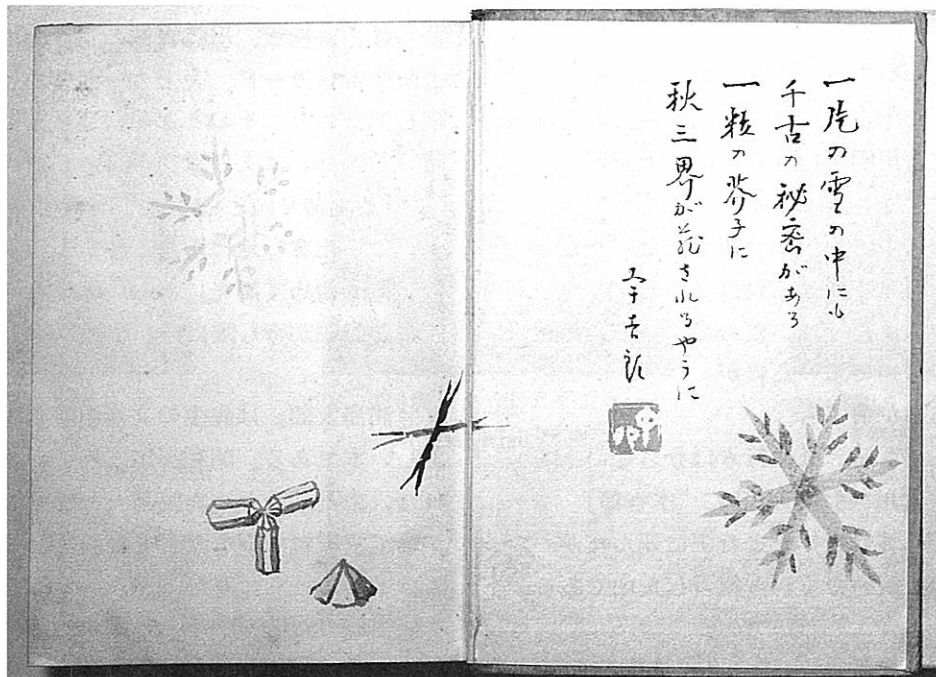
1996 (平成8) . 6 . 1

発行 / 中谷宇吉郎 雪の科学館  
〒922-04 石川県加賀市潮津町イ106番地  
TEL 07617-5-3323 FAX 07617-5-8088

# 企画展 宇吉郎のことば展

読者にあてた著書へのサイン

平成8年6月1日～7月9日



『樹氷の世界』の見返しから

「雪は天から送られた手紙である」ということばで知られる中谷宇吉郎は、数多くの随筆で、科学の面白さを伝え、読者に新鮮な感動を与えてきました。

「宇吉郎のことば」として今回企画したのは、ある熱心な随筆の読者に向けて宇吉郎が書いたことばです。現在横浜市に住む佐々光典氏は、宇吉郎の本が出版されたり、古書店で手に入ったりすると、宇吉郎宅を訪ね、サインをしてもらっていました。35冊のそれらの著書には、随筆の中には書かれていないものやその時々の中谷宇吉郎の心境が込められているものも含まれており、それらの背景にも触れながら、一括して紹介します。

これらのことばから、宇吉郎の人間性や科学観、芸術観をうかがい知ることができ、私達が生きていくうえでのヒントが得られるかもしれません。

## 中谷先生の識語をめぐって

佐々 光典

「月の手前に地球がある

社会の手前に家がある

林 久男君に 宇吉郎」

わたくしが会社の人事担当をしていたときに入社した林君が結婚することになった頃、先生の『黒い月の世界』が刊行された。この本は、私が先生のご指名で校正を担当し、あとがきにわざわざその旨を書いて下さっているが、林君は予めから中谷先生が好きだったので、結婚祝いとして贈るために先生にお願いし、同書の見返しに書いてもらったのがこの識語である。実に含蓄に富んだ文言で、林君はこれは家宝ですと言っている。

私の勤務が大阪から東京の本社に変わってから、私の妻の歳の離れた弟で阪大法科を出て大津の新日本電気に就職した古川明というのが度々上京して来るので、ある日先生をお訪ねするときに連れて行った。その日の雑談の中で先生が「鮎ずしが好きだ」と言われてから、彼は上京する時は必ず鮎ずしを土産に持って来るようになっていたので、彼のためにもと1冊差出して書いて頂いたのが

「火星へ行ける日が来ても

テレビ塔から落ちる 紙の行方は分らない

古川 明君のために 宇吉郎」

である。残念ながら彼は定年をまたずに死んだが、この本は家に残して置いてくれと遺言した由である。

思えば私は「親んで狎(な)れず」という戒めを破って狎れるだけに終始し、先生のご本の出るたびに識語をお願いしてきた。

先生が亡くなれば、朝日新聞社から随筆選集3巻が出版されることになって、収録するものを選ぶために所蔵の単行本の目録を作った。その用紙は横長の巻物の形になって、奥さまや芙二子さんが“勸進帳”と呼んで笑い出されたことを思い出す。あのとき、識語の存在には気付いていた筈なのだが、既に30年余を過ぎ、いつ、どのようなわけで先生が記されたのかを思い出せないものが殆どである。しかし改めて読み返してみても、先生の卓抜な着想、秀れた洞察力を感じさせられる。この老化した頭でその意

味を述べてはかえって歪曲することになるので、その識語を読む人のその人なりの理解に委ねるのがいちばん良いと思う。ただ、私個人に忘れることのできぬもの若干を記しておきたい。

まず記しておきたいことは、私は『冬の華』以来先生のご本が出るたびに必ず求めてきたが、昭和20年3月の大阪市空襲で、全焼してしまったことである。だから今回雪の科学館にまとめて展示された本のうち、それ以前に発行されたものは、その後古書店漁(あき)りをして見つけては求めたものである。従ってその識語はいつ書いて頂いたか分からないのが残念である。

私が本を全部失ったことを知られた先生は『冬の華』の第三版を恵んで下さった。後に大阪の桜橋付近の古書店に立ち寄ったとき、『冬の華』『続冬の華』『第三冬の華』の3冊が一括りになっていた。『冬の華』は正に初版、当時岩波の刊行物に入っていた図書館検索性カード、売上カードまで入っている。雀躍して求めた。そのときの喜びを先生にお伝えした時『冬の華』に次の識語を書いて頂いた。

「烏兔匆匆(うとそうそう) 三十年 以て人生と為す

此書 地に潜むこと二十六年

初めて陽光にあふ、縁なる哉」

先生のお顔が今も眼に浮かぶ。

『浦島太郎』は先生の文章と藤城清治氏の影絵の美しい本である。昭和26年、暮しの手帖社から出された。未だ幼なかつた娘2人と蚊帳の中で真中に私が寝て宮沢賢治の本などを読み聞かせたりしたが、この本も娘たちは喜んで聞き、太郎が亀の背に乗って龍宮城へ行く途中のところ、泡がブクブクブクと長くつづく処で寝息を立てるようになる。毎夜聞かせてもあきずにせがむのだった。この話を先生にしたところ、大変喜ばれて書いて下さったのが、

この話をききながら眠った子供たちのうち上の二人の娘はノース・ウェスタン大学で地質学と近代美術を勉強してゐる 次の子は戦後のひどい時代に亡くなった末の女の子はドルクマン教授についてピアノをやっていたが、日本語を忘れたので慌てて連れ戻った 今は「わたしの足を蚊が六つ食べた」などと言っているが三カ月もすれば大丈夫だらう 一九五四年十月大阪にて

である。実に微笑ましい一文である。

「氷は金属である」

これは昭和33年宝文館から出た『北極の氷』に書かれたもの。書中にもこの言葉は出ているが、先生

が昭和28年以来アメリカの雪氷凍土研究所で氷の結晶について研究された内容をもとにして、ユニークな表現をしたものである。これはジャーナリズムにも取り上げられ、一時は流行語になった。例によってお宅に伺ってお話しをされていて、書の中でグラフから数式を出しておられるのが無知の私には魔術のように思えて、どうしてこのグラフからこんな難かしい数式ができるのですか、と聞いたところ、先生はいつものように笑顔で「おいおい、僕は専門家なんだよ」と言われた。あの声音が忘れられない。

『北海道』は木田金次郎氏の絵と先生の文章とで成ったもので、昭和35年に刊行された。私は阪急梅田の駅前にあった書店でこの本を見つけた。私は当時尼崎工場勤務で西宮市南郷町に住んでおり、本社へ出張した時先生をお訪ねして書いて頂いたのが、

「北海道で三十年 雪を相手に暮らしたが  
別に感慨もない 欲を言へばもう二百年  
くらい この仕事を続けたい それくら  
いの問題が残っている」

である。ところで、先生はこの本を当時出版元から受け取っておられず、市販されていることをご存じ無かった。そんなことで、木田氏からも頼まれ、出

版社と話しをすることが必要になった。先生は、わざわざ大阪へ出かけられ、私も同行した。出版社は芦屋に近い処だったが、先生のお体が悪いとは知らず、徒歩で行き、話が済むとまた夙川まで戻った。私の南郷町の社宅で休息されたが、書棚に室生犀星のものが並んでいるのを見られて「寺田先生も室生犀星をお好きであった」と云われたのには、先生の文章には出てこないことなので驚いた。その後、サントリーの鳥井信治郎氏のお宅へ行かれるのに「お嬢さんも一緒においで」といわれ、二女が行くといひ、鳥井家にお邪魔した。

翌年1月私が本社転勤になり、3月に家族を呼んで世田谷区深沢町の社宅に転居したとき、初めて先生がガンで東大病院に入院されたことを知った。お体が悪い中をわざわざ大阪まで出かけられた先生の心中を思うと、居たたまれなかった。

『寺田寅彦の追想』は、私製の箱に、標題も先生に書いて頂いたものである。この識語の

「花よりも美しきものは 空の光である

空の光よりも美しきものは 人の心である」

は、恩師寅彦への思いを込められた言葉だが、私には、正に先生ご自身のお心である。

## 宇吉郎と佐々氏の出会い

高校時代から吉村冬彦（寺田寅彦のペンネーム）の愛読者であった佐々光典氏は、大学に入学した昭和13年に出版された中谷宇吉郎の『冬の華』に魅せられ、その後出た宇吉郎の著作を残らず求めて読んだ。

佐々氏は、昭和20年3月の大阪市空襲で、戦前に集めた書籍を一切失った。そして、無念の思いを一面識もない宇吉郎に手紙で知らせたことが、その後の2人の交流の発端となった。

【昭和20年3月22日 佐々氏から宇吉郎へ】

「やうやく彼岸となりましたが御地は相変らずのことと存じます。今般学徒に付て一年間休学断行といふ措置も発表されましたが、之れも相当の手加減なしに一律的に行はれるのでは果して此の戦争を踏みこたへる底力も枯渇するのではないかと案じてゐます。さてわたくし去る十四日未明当地の空襲に因り一家無事乍ら、家財道具一切焼失致し、それはそれとして他の集め居りし書籍と共に先生の御著書並びに寺田先生の御著書（殊に「藪柑子集」の初版も）、又御令弟中谷治宇二郎氏の「日本石器時代提要」、「日本先史学序史」も共々に灰燼に帰せしめたこと、日本文化の為に実に残念に存じ、又先生に対しても申訳ないことに存じ取敢ずお詫び申

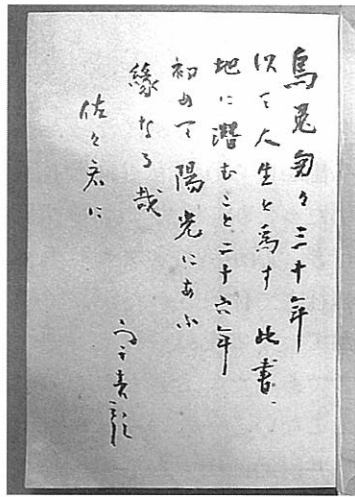
上げる次第です。焼跡に「吉村冬彦著」といふ灰の残つてゐるのを見たときは涙がこぼれました。では益々御壮健に御研究の程お祈りします。

【昭和20年4月8日 宇吉郎から佐々氏へ】

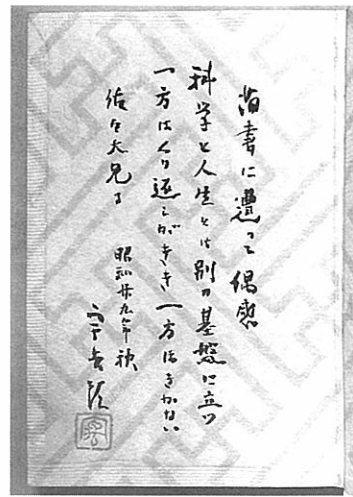
「御たより難有う御座いました 空襲で折角御蒐集の本をすっかり失くされたことは誠に御痛恨のことと存じます 家財道具を全部焼かれたことは今度の場合は金では補充がつかぬ点が誠に御困りのことと存じます しかしさういふ苦境にあつて猶本を愛惜される心持を失はれなかつたことに対して敬意と祝意とを表します（中略）御見舞として「冬の華」を一部御送り致します もうこの本は今日到底手に入らぬと思ひますし 私にとっては初めてのことでやはり一番可愛い本でありますので少し手許に残してをきましたので 御送り致します 何卒御元気の程を願います とり急ぎ匆々」

【昭和20年5月16日 佐々氏から宇吉郎へ】

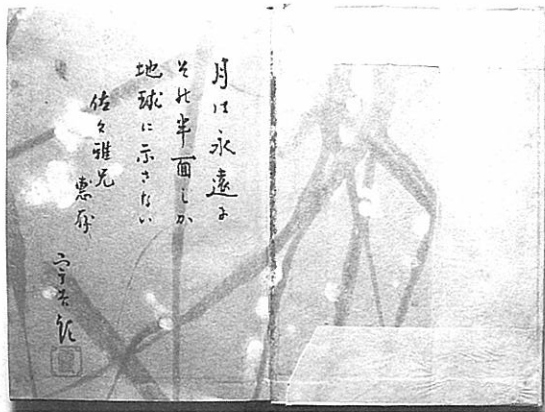
「罹災家事整理の爲め、外泊を許されて帰阪しました処先生お心盡しの「冬の華」に何ともお礼の申しやうのない感激に浸りました。（中略）未見の一野人の爲めに斯く迄御心をかけられること深く感佩致します。（後略）」



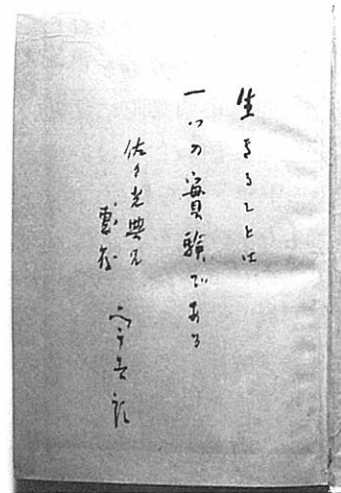
1. 『冬の華』〔第一随筆集〕岩波書店 昭和.13.9.10



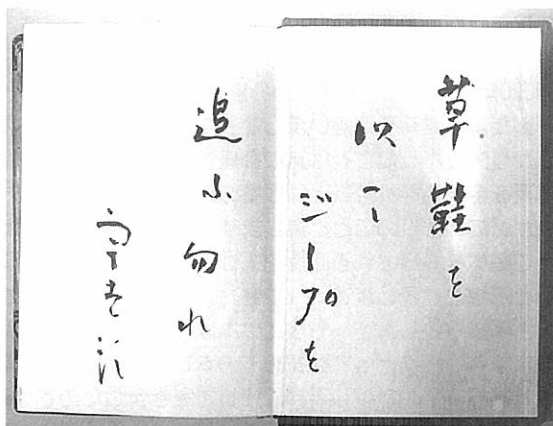
2. 『続冬の華』〔第二随筆集〕甲鳥書林 昭和.15.7.5



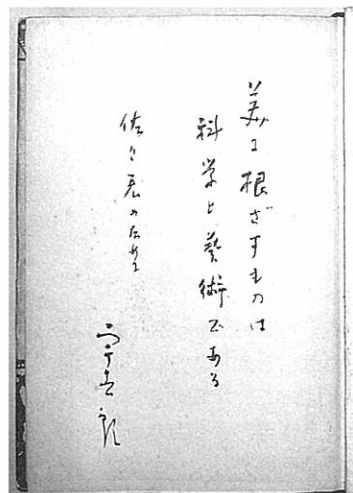
3. 『続冬の華』〔第二随筆集〕甲鳥書林 昭和.17.7.10



4. 『続冬の華』〔異版〕養徳社 昭和.23.11.20



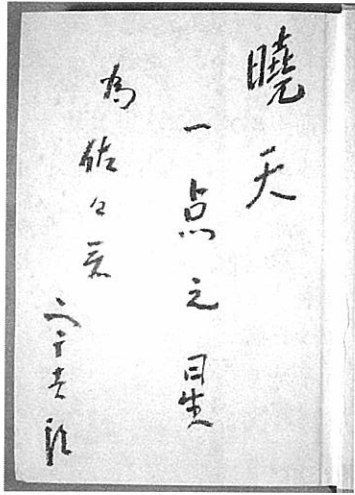
5. 『日本の科学』創元社 昭和.15.8.23



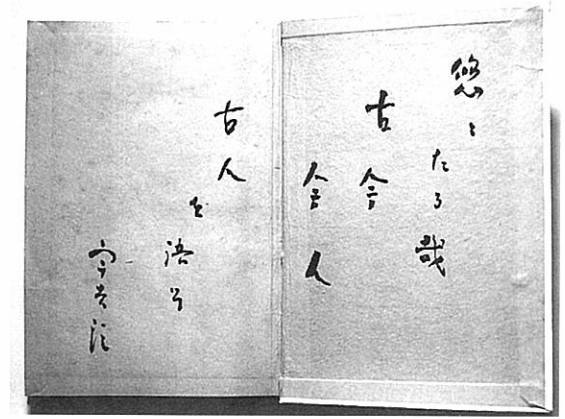
6. 『日本の科学』創元社 昭和.15.10.27

1 『冬の華』「鳥兔(うと)」=月日、歳月のこと。  
 「匆々(そうそう)」=あわただしい様子。  
 佐々氏の文中にもあるように、昭和36年に古書店で購入し、宇吉郎に書き入れてもらったもの。「地に潜むこと二十六年」とあるが、初版発行は昭和13年なので正確には23年間地に潜んでいたことになる。

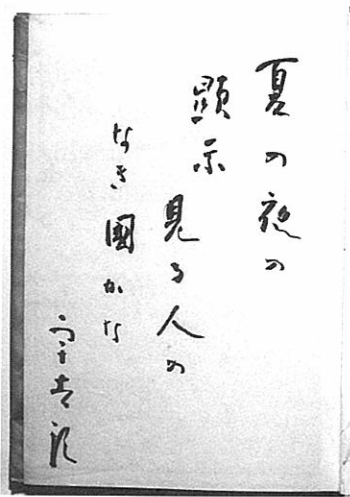
2 『続冬の華』「旧書」=旧書。  
 戦前に出されたこの本に戦後遭ってふと思い浮かんだ気持ちを書いたもの。  
 3 『続冬の華』「恵存」=「どうかお手元に置いて下さい」の意。  
 5 『日本の科学』「草鞋」=わらじ。



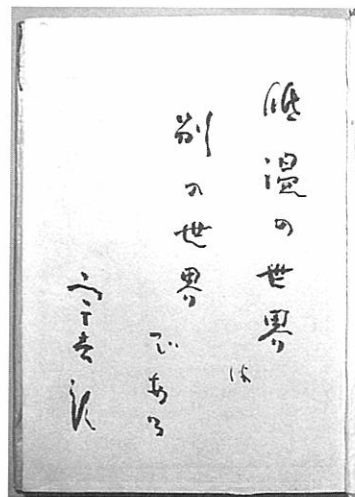
7. 『第三冬の華』〔第三随筆集〕甲鳥書林 昭和.16.9.25



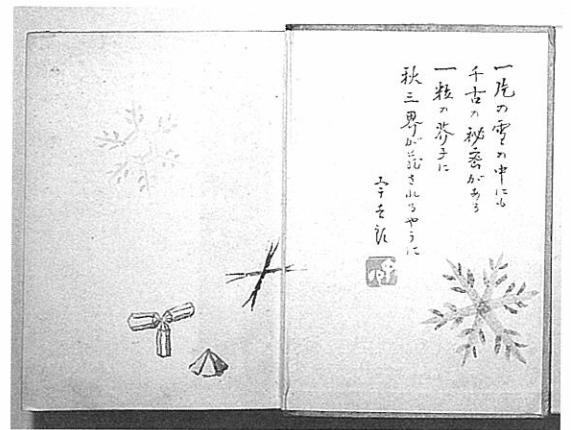
8. 『第三冬の華』(異版) 養徳社 昭和.24.1.15



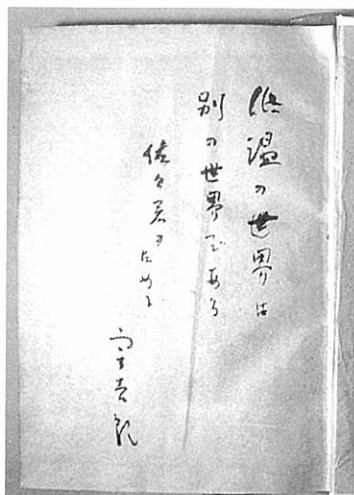
9. 『雷の話』岩波書店 昭和.17.3.15



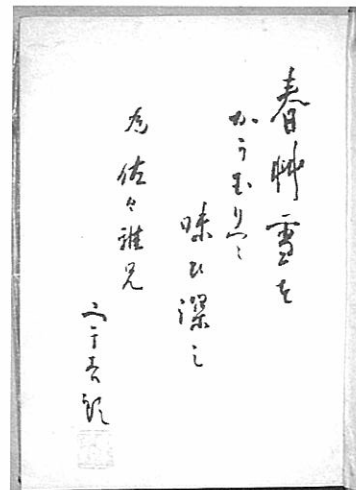
10. 『寒い国』岩波書店 昭和.18.6.20



11. 『樹氷の世界』〔第四随筆集〕甲鳥書林 昭和.18.9.20



12. 『樹氷の世界』(異版) 養徳社 昭和.23.12.15

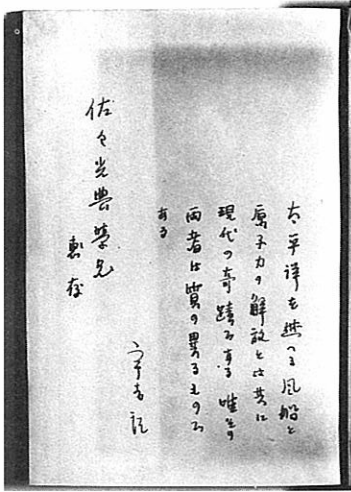


13. 『春艸雑記』〔第五随筆集〕生活社 昭和.22.1.30

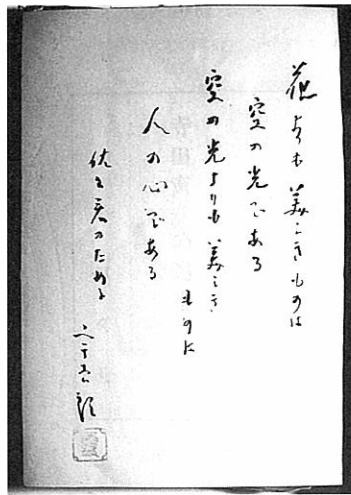
11『樹氷の世界』 18『雪の研究』  
 宇吉郎の師・寺田寅彦の随筆集『柿の種』(昭和8年)に  
 収められた随筆の中に、「粟一粒秋三界を蔵しけり」とい  
 う一文があり、これを踏まえたものであると思われる。

粟

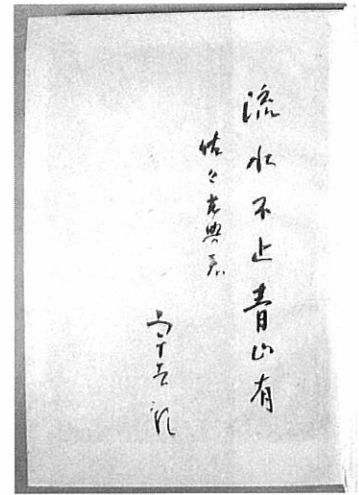




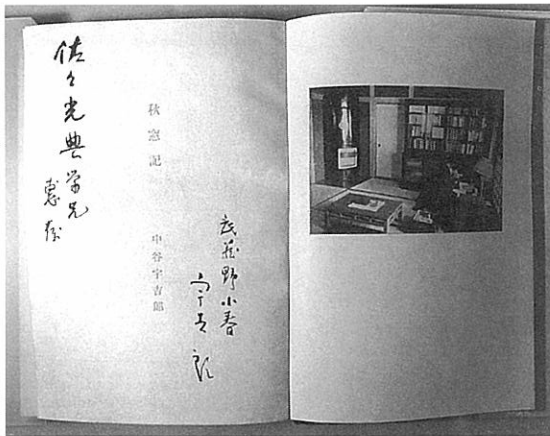
14. 『春艸雑記』(異版)  
生活社 昭和22.1.30



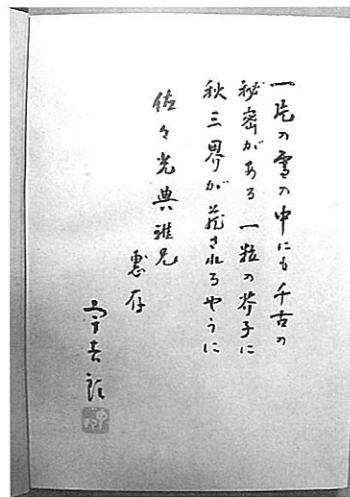
15. 『寺田寅彦の追想』  
甲文社 昭和22.4.30



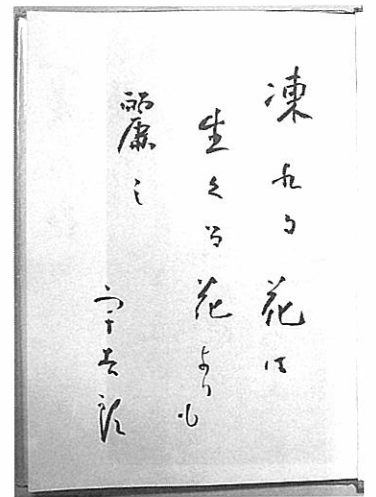
16. 『楡の花』〔第六随筆集〕  
甲文社 昭和23.8.30



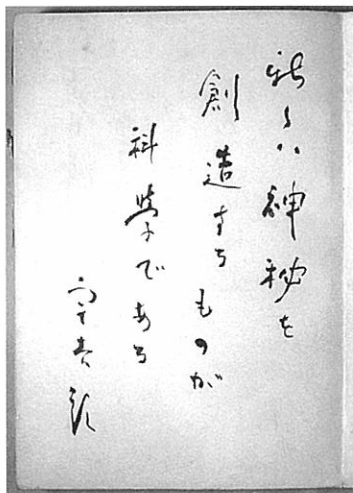
17. 『秋窓記』青磁社 昭和24.1.31



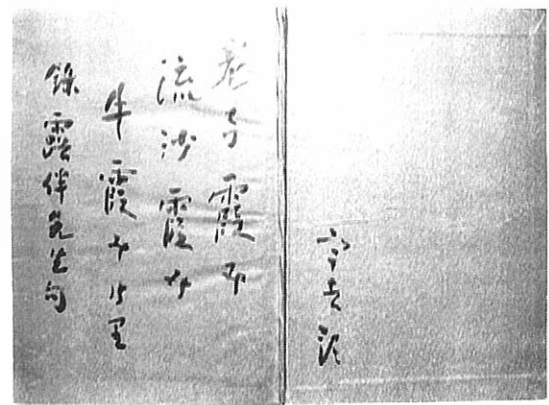
18. 『雪の研究 結晶の形態と  
その生成』岩波書店  
昭和24.3.1



19. 『霜の花』(花鳥政人と共著)  
甲文社 昭和25.1.1



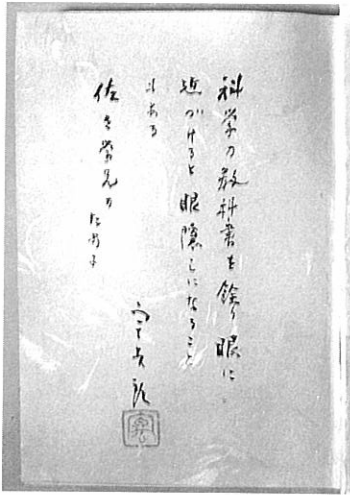
20. 『霧退治 科学物語』岩波書店 昭和25.3.15



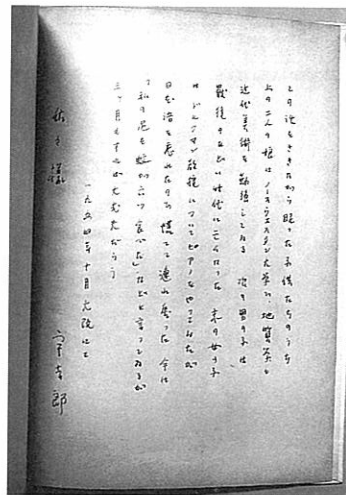
21. 『立春の卵』〔第七随筆集〕書林新甲鳥 昭和25.3.30

14 『春艸雑記』

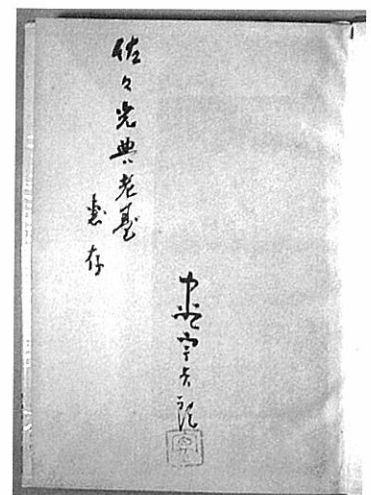
「太平洋を越える風船」とは昭和19年11月に国内12カ所の海岸から飛ばされた風船爆弾の事。紙製の気球に小型爆弾をつるしたもの。この本のカバーは風船爆弾の使用紙の残部を用いたもので昭和22年1月30日発行の非売品。



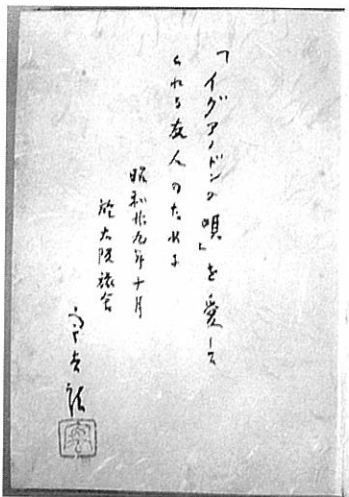
22. 『日本のころろ』  
〔第九随筆集〕  
文藝春秋新社 昭和.26.8.15



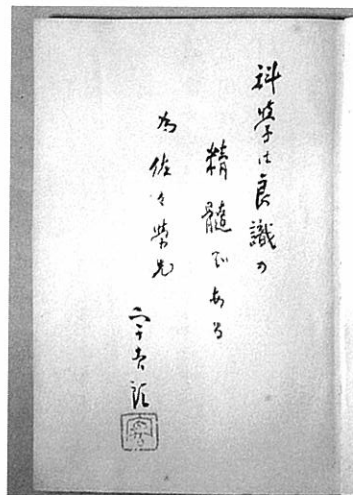
23. 『浦島太郎』  
暮らしの手帖社 昭和.26.12.10



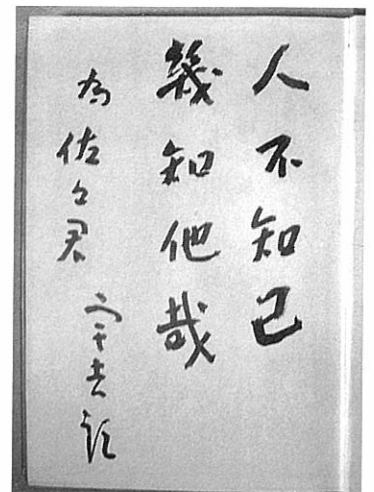
24. 『日本の発掘』  
法政大学出版局 昭和.27.7.20



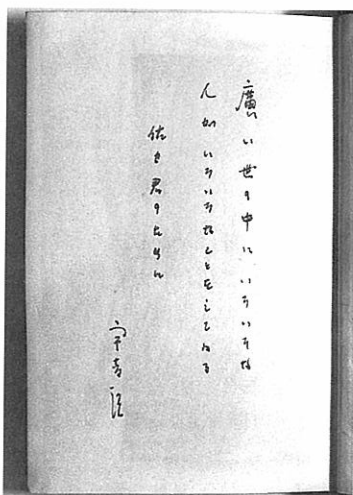
25. 『イグアノドンの唄』  
〔第十随筆集〕  
文藝春秋新社 昭和.27.12.25



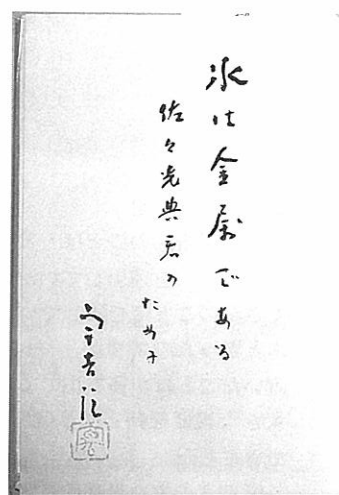
26. 『民族の自立』  
新潮社 昭和.28.12.20



27. 『知られざるアメリカ』  
〔第十一随筆集〕  
文藝春秋新社 昭和.30.5.25



28. 『百日物語』  
文藝春秋社 昭和.31.5.20



29. 『北極の水』  
宝文館 昭和.33.4.10

27『知られざるアメリカ』

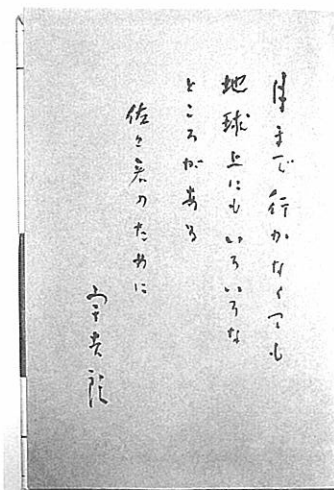
「人は己を知らずしてどれほど他を知る哉」

宇吉郎は昭和27年6月から29年8月までの約2年間に、雪氷凍土研究所（SIPRE）の顧問研究員として米国に招かれ、家族と共にシカゴ郊外のウィネツカに居住。氷の研究を開始する。

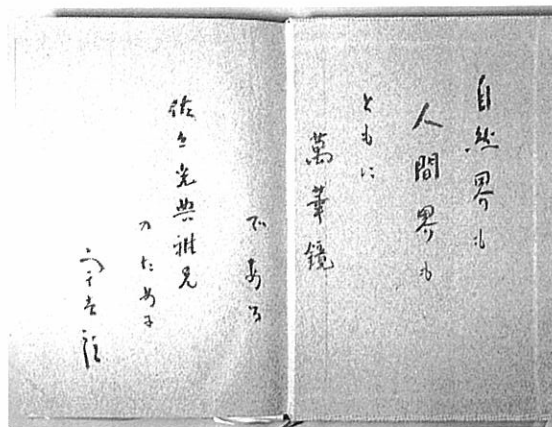
多少は知っていたつもりのアメリカだったが「今まで知らなかつた面が、たくさんあったことが分つて驚いた」（『知られざるアメリカ』の後書きより）という心境から生まれたことばであろう。

28『百日物語』

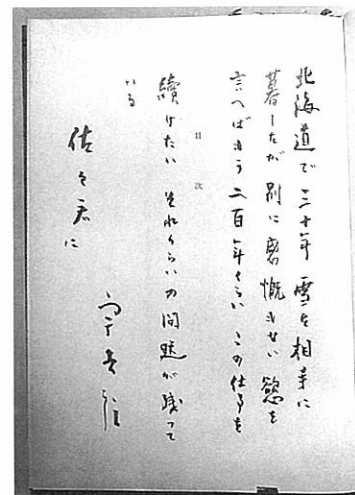
この本は昭和30年の7月から9月にかけて『西日本新聞』に連載されたものを5～6篇だけ差し替えて大部分を納めたもの。この本の後書きに、宇吉郎は「世の中は広大なもので、いろいろな人が、いろいろなことをしている。風俗もちがひ、人情もちがひが、人間というもの、皆底には善意をもっている、という気が、この頃して来ている。この百回の随筆は、そういういろいろな話を集めたものである。」と記している。



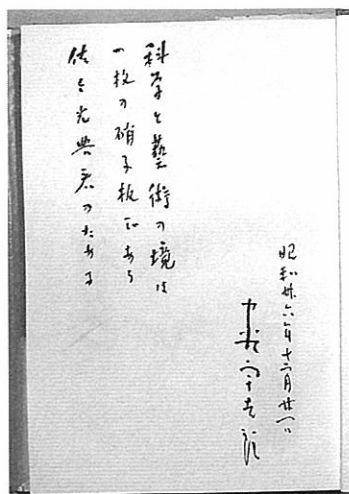
30. 『黒い月の世界』  
〔第十二随筆集〕  
東京創元社 昭和.33.7.5



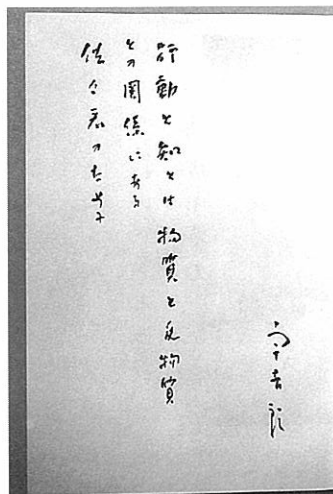
31. 『文化の責任者』  
文藝春秋社 昭和.34.8.20



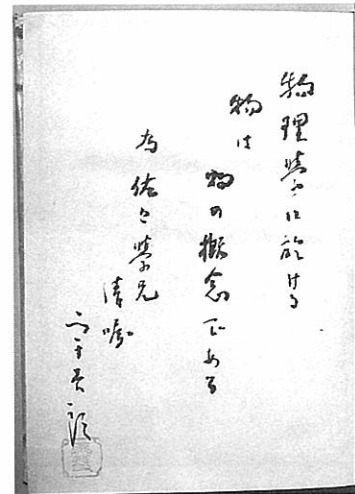
32. 『北海道』（木田金次郎と共著）  
中外書房 昭和.35.7.25



33. 『物理学者の心』  
（寺田寅彦と共著）  
学生社 昭和.36.11.30



34. 『太陽は東から出る』  
新潮社 昭和.36.12.5



35. 『物理学序説』 寺田寅彦  
岩波書店 昭和.22.4.25

30 『黒い月の世界』

昭和31年12月から翌年2月にかけて、宇吉郎はハワイのマウナ・ロア火山で雪の結晶と凝結核（大気中の塵の微粒子）の観測を行った。ここの溶岩地帯は、見渡す限り、黒い溶岩の原で、宇吉郎はここを「黒い月の世界」と呼んだ。「こうつきつきと面白いことが出てきてはととも齢などとはいられない。珍しいところを見たり、面白いことにぶつかったり、研究商売もなかなか悪くないものである。」（『黒い月の世界』より抜粋）

編集後記

中谷宇吉郎のことば、といえはすぐに「雪は天から送られた手紙である」を連想していたのですが、今回ご紹介しただけでもたくさんのことばを残していました。これらのことばを眺めていてふと思ったのですが、「月」「地球」「天」など広い世界に視点を置いたことばが多く出てくる事に気づきませんか？ 地球規模の大きな視野を持って研究し、生きた宇吉郎を私は感じる事ができました。

所蔵者の佐々光典氏は単なる読者というにとどまらず、随筆集の誤字、脱字を教示しており、『黒い月の世界』が出される時には、宇吉郎から最終校正を頼まれたそうです。これらのことばは、宇吉郎と一人のファンとの間の信頼関係の中から生み出されたことば、とも言えるのではないのでしょうか。（C.M.）